論文審査及び最終試験又は学力の確認の結果の要旨

甲・乙	氏名	城 有美
学位論文名	Seasonal Influenza Infection Risk Factors of Personnel at Shimane University Hospital	
学位論文審査委員	主査	竹谷 健 印
	副査	礒部 威 印
	副査	田村 太朗 印

論文審査の結果の要旨

季節性インフルエンザは小児や高齢者・免疫抑制状態の者には致命的な合併症の原因となりうる感染症である。病院職員は病院内で重症化高リスク患者に感染を拡大する可能性があり、病院管理者は病院職員のインフルエンザ感染を最小限に抑える必要がある。そこで、本研究では、病院職員を対象に2014年から2017年のインフルエンザワクチン接種と同時に職員の背景、インフルエンザ罹患歴、その診断方法、ワクチン接種状況等に関するアンケート調査を実施した。本研究は病院職員におけるインフルエンザ罹患の危険因子の探索を目的とする後方視研究で、全シーズンとシーズン毎での解析を行った。

1. 全シーズンを通して5,891名からの回答(有効回答数:5,450)を得た。

2. インフルエンザ感染(迅速キットによる診断)は333名(6.2%)であった。全シーズンを通したインフルエンザ感染の危険因子として、単変量解析では、女性(OR:1.36, 95%CI:1.02-1.81)、30歳代(OR:1.54, 95%CI:1.04-2.29)、15歳未満の小児との同居(OR:2.18, 95%CI:1.70-2.78)の3因子に有意差を認めた。一方、多変量解析では、女性(OR:1.43, 95%CI:0.82-2.52)、30歳代(OR:1.24, 95%CI:0.77-2.00)、小児との同居(OR:2.06, 95%CI:1.29-3.29)となり、15歳未満の小児との同居のみが有意差を認めた。また、ワクチン接種の有無で感染頻度の有意差は認めなかった。ここで、30歳代の者は57.2%で子供と同居しており、“30歳代”と“同居”は交絡因子であると考えられた。

3. シーズン毎の解析では性別やワクチン接種の有無で感染頻度に有意差を認めなかったが、2013/2014シーズン以外の3シーズンでは小児との同居者の感染が有意に高頻度であった。

以上の結果から、申請者は15歳未満の小児との同居をリスク因子と結論した。本研究は病院内での病院職員による季節性インフルエンザ感染に関し、その危険因子を明らかにするとともに、病院職員の家庭内でのインフルエンザ感染対策の重要性を統計学的に示した貴重な研究であり、今後のインフルエンザ感染対策に一助となりうるものである。

最終試験又は学力の確認の結果の要旨

申請者は、病院職員におけるインフルエンザ罹患の危険因子として、15歳未満の小児との同居がリスク因子であることを明らかにしたことは、病院職員の家庭内でのインフルエンザ感染対策が必須であることを示した。質疑応答も的確で、学位授与に値する研究と判断した。 (主査:竹谷 健)

申請者は、季節性インフルエンザウイルス感染症の発症の危険因子について病院ならびに医学部職員を対象としたアンケートを実施し、年齢、性別や同居者年齢が寄与することを明らかにした。感染対策につながる研究であり、発表及び質疑応答は的確で関連知識も豊富であり、学位授与に値すると判断した。

(副査:礒部 威)

申請者は病院においてインフルエンザ対策に寄与するために、その観戦の危険因子について適切な研究のもとに評価を行い、年齢、性別、家庭状況などの寄与を明らかにした。発表、質疑応答についても適切であり、学位授与に値する中身であった。 (副査:田村太朗)